

Title	魯迅と胡愈之：魯迅はなぜソ連に療養に行かなかったのか
Sub Title	Lu Xun and Hu Yuzhi : the reason why Lu Xun didn't go to the Soviet Union to recuperate
Author	長堀, 祐造(Nagahori, Yuzo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2012
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Hiyoshi review of Chinese studies). No.5 (2012.) ,p.141- 173
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	『魯迅とトロツキー：中国における『文学と革命』』(平凡社、2011年9月)正誤表挿表
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20120331-0141

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

魯迅と胡愈之

——魯迅はなぜソ連に療養に行かなかったのか——

長堀祐造

一、魯迅と胡愈之

ジャーナリスト、出版編集者、エスペランティスト、翻訳家、中共の革命政治家と多彩な顔を持つ胡愈之の生涯は魯迅との出会いを抜きに語ることはできない。そして胡愈之は最晩年の魯迅とも接触を保ち、魯迅の葬儀に際しては中共秘密黨員として工作に当たっていた救国会を前面に押し出し、中国史上空前絶後の民衆葬を演出した。¹のみならず、胡愈之は幾度かの重要局面で文学者、社会運動家としての魯迅の活動に関与している。本稿では、一九三六年初、中共・コミンテルンルートによるソ連での療養勸奨を魯迅に仲介することとなった胡愈之と魯迅との間のやり取りと、その際の魯迅の謝絶の背景を考察する。まずは胡愈之の生涯を魯迅との関係を軸に概観しておく。

胡愈之（一八九六年九月九日～一九八六年一月十六日）、原名・学愚、字・愈之、子如。原籍は浙江上虞県豊惠鎮。祖父胡光甫は清朝の京官御史、父胡慶皆は晩清の秀才という読書人の家柄に生れた。父は上虞県維新派の領袖で、新式の学校を創設、教育事業に邁進したが、一九二四年、多額の債務を残して死去、胡愈之はその返済に苦労することとなる。⁽²⁾

胡愈之は地元の私塾、新設の小学堂を経て、一九一一年紹興府中学堂に進学する。このとき、紹興府中学堂で学監兼博物学教員をしていたのが、ほかならぬ魯迅その人であった。胡愈之は「我的中学生时代（私の中学生時代）」で次のように回想している。

当時紹興府中学堂の校長陳（？）〔字英―長堀訳注、以下同〕先生と学監の周豫才「魯迅」先生はともに日本留学生で、学生たちはみな二人が同盟会や徐錫麟と関係があったことを知っており、「清朝皇帝の」誕生日には辮髪のカツラをつけ、学生を引き連れて万歳碑に叩頭したが、学生たちはみな、二人は革命党で、やむを得ずそうしているにすぎないことを知っていたので、二人には敬意を払っていた。⁽³⁾

このころ、同学堂では清朝に反対して辮髪を切る運動が学生の間起こるが、魯迅は学生の身に弾圧が及ぶのを案じ、その心情を尊重しつつも自重を求めたこと、また教師としての魯迅は「学校では厳しいことで有名で、学生はみな恐れて」おり、ある晩、胡愈之が「数人の同級生と学監のいないときに、学監室の窓から中に忍び込み、すでに書きあがっていた学生の学業態度に関する評語を盗み見たが、魯迅先生の私に対する評価は『勉強嫌い』であった」ことなどを同じく「我的中学生时代」で回顧している。⁽⁴⁾

しかし、胡愈之は翌一九二二年の第二学年が始まると病気のため宿舍で動けなくなる。医学を修めた魯迅が診断すると「傷寒病「急性の熱病」であった。魯迅は胡愈之に急いで服薬させた上、病気が軽快するのを待つて帰郷させた。こうして魯迅と胡愈之との師弟関係は一年ほどでひとまず終わりを告げたのであった。

その後、胡愈之は杭州英文専科学校に行くも同校は半年で閉校となり、再び帰郷するが、胡愈之はこのころ、エスペラント語（中国語では世界語）を学び、やがてその縁で師匠魯迅との関係が復活する。一九二四年、胡愈之は家庭の経済状況が厳しくなったため、学業を断念、上海に出て張元済が所長を務めていた商務印書館編訳所の「見習い」となり、「刻苦自学」しながら編集、文筆業の道に第一歩を記したのであった。『東方雜誌』を擁する商務印書館には、茅盾さらには胡愈之と同郷の杜亜泉などが奉職していた。『魯迅全集』に拠れば、茅盾と魯迅との間で書信のやり取りが確認できるのは一九二一年四月十一日が最初、初会見は一九二六年八月三十日であり、胡愈之が商務に入った時点では茅盾と魯迅との直接的関係はない。一方、杜亜泉は当時『東方雜誌』主編を務め、蔡元培の古くからの友人で、北京時代の『魯迅日記』一九一三年二月十六日の条にも「午後、杜亜泉来る」とあり、魯迅とは知り合いであったことがわかる。そうしたことが商務での胡愈之の処遇にどう影響したかはわからないが、胡愈之はほどなく『東方雜誌』に国際問題の文章を載せ始め、その後一九二七年まで中心的な編集者として活躍した⁵⁾。この間、一九二〇年、巴金らと上海世界語学会を再建、さらに一九二一年正式に成立した茅盾、鄭振鐸、周作人らが発起人とする文学研究会にも参加し、新文化運動推進に努めた。

そして、胡愈之と魯迅との連絡復活が確認できるのは、一九二一年十一月四日付『魯迅日記』でのこと。「午前、胡愈之の手紙を受け取る」とある。『魯迅日記』に胡愈之の登場する日付を確認すると以下のようになる。

一九二一年十一月四、五、三十日。十二月三、十三、二六、二七日

一九二三年四月二八、二九日

一九二六年八月三十日

一九二七年十月十八日

一九三一年八月二八、三一日

一九三三年一月十一日、三月二四日

一九三五年八月二七日

一九三六年一月二九日

さて、この一九二一年十一月の胡愈之・魯迅間の通信は、同年五月、日本でメーデー集会に参加し、日本官憲から危険人物として追放処分を受けたエロシエンコが、十月、上海にやってきたことに起因する。日本のエスペランティストから連絡を受けていた胡愈之はエロシエンコとすぐに接触し、その作品を魯迅に送って翻訳を依頼し、『小説月報』への訳載を矛盾と企画したことがこの時期の『魯迅日記』や他の資料から推測できる。翌年、胡愈之の紹介で北京に赴いたエロシエンコは、魯迅、周作人兄弟や蔡元培の後押しで北京大学世界語科講師として迎えられた。周知のとおり、魯迅家に寄寓したエロシエンコが北京を離れ一時音信不通になると、魯迅は小説「鴨的喜劇（あひるの喜劇）」（『呐喊』所収）にエロシエンコを登場させ記念とした。エロシエンコを介した魯迅と胡愈之の通信は一九二三年まで続くが、その後しばらく『魯迅日記』から胡愈之の名は見えなくなる。そして、一九二六年八月三十日、北洋軍閥政府の弾圧を逃れ北京から上海を経由して厦門へ向かう途次の魯迅を、在上海の作家、編集者

らが招宴する機会があり、胡愈之もここに列席したことで再び『魯迅日記』に登場する。翌年十月十八日の魯迅と胡愈之との会見は商務印書館、開明書店の編集者が広州から上海に移り住むこととなった魯迅を歓迎する宴でのことである。胡愈之はこの年春に起こった四・一二クーデタに対し、国民党への抗議文を起草していたため、この会見からほどない翌一九二八年一月、白色テロを警戒して渡仏した。一九三一年、フランスからの帰国の途次、胡愈之はエスペラント語の知識を生かしてモスクワを訪問、その目で見えたソ連の政治、経済、社会を『莫斯科印象記（モスクワ印象記）』として、国民党新生命派の樊仲雲が主宰する新生命書店から出版すると、魯迅はこれを高く評価し、「林克多『蘇聯聞見録』序」（『南腔北調集』所収）で「この一年で二冊、警戒せずともよく、意外や読み通せた本に出会った。一冊は胡愈之先生の『莫斯科印象記』、もう一冊はほかならぬこの『蘇聯聞見録』である」と書いた。一九三一年二月、上海に戻った胡愈之は古巣の『東方雜誌』主編となる一方、同年上海で楼適夷らと中国プロレタリア世界語連盟（後、中国青年世界語者連盟に改称）を結成、同連盟は左連などとともに、中共傘下の大衆組織となった。一九三三年一月、胡愈之は『東方雜誌』新年号で「新年的夢想（新年の夢想）」というアンケート特集の企画で商務の経営者王雲五と衝突、主編の職を辞した。魯迅もアンケート対象だったが、解答を寄せることなく、言論統制の現実を無視したこの特集の「非現実性」を批判し、「夢をみるのは自由だが、夢を語るとなると不自由だ。夢をみるとは本当に夢をみることだが、夢を語るとなると嘘をつくのは避けがたい」（『聽說夢（夢の話）を聞く』、『南腔北調集』所収）と批判した。その後、胡愈之は語学力を生かしてフランスのアヴァス通信社上海支局に職を得、時間的自由を確保しながら出版活動や人権擁護運動、さらには中共の秘密活動に従事するようになった。一九三三年初には、魯迅の要請を受け中国人権保障同盟に参加、逮捕された多くの共産党人や進歩派の人々の救援に尽力している。その中には陳庚、廖承志、ニューラン、陳独秀、丁玲らがいた。同年九月、胡愈之は

中共に特別党員して迎えらる。周恩来が直接指導し李克農が責任者を務める中央特科の直属下に置かれた特別党員であったため、上部とは単線でつながる完全な秘密党員であった。実は、胡愈之はこれ以前から中共入党の意向を持っており、茅盾の紹介で一九三一年秋には当時中共臨時中央の政治局常務委員で、以前から『東方雜誌』への寄稿者で顔見知りでもあった張聞天とも会見しており（張聞天には文学研究会の作家という経歴もあった）、中国プロレタリア世界語連盟結成の頃には実質的に中共の活動に参加していたと見られる。しかし、王明の極左路線に従う当時の中共は胡愈之を第三党改組派と見なして批判するというような状況もあって、正式の入党は遅れたようだ。⁷⁾

さて、中共中央特科直属の秘密党員胡愈之は一九三五年愛国人士、杜重遠⁸⁾から張学良が中共との連合を希望していることを聞きつけ、中共上層部に報告のため、単線連絡先の宣侠父⁹⁾を追って同年末、上海から香港に向かった。宣侠父は情報の重要性に鑑み、胡愈之をバリ経由で在モスクワ駐コミンテルン中共代表団に直接報告に赴かせることとし、モスクワに連絡すると、中共代表団は同意の返電を送ってくる。同時に、魯迅を病氣療養のためソ連に招請するので、胡愈之が香港まで魯迅に同道してくるようにと指令してきた。¹⁰⁾そこで、胡愈之は、翌一九三六年二月、三月頃再び上海に戻り、魯迅を説得するのである。結局魯迅はソ連には行かなかったのだが、この問題は次章で詳しく述べることになる。訪ソ後、胡愈之は香港を経由して上海に戻り、中共の路線に従って救国会を實質的に領導する立場に就き、同年十一月の抗日七君子逮捕事件ではその救援に尽くした。この間、十月に魯迅が逝去した際、胡愈之は葬儀委員に名を連ね、救国会主導の葬儀を演出、中共の反蔣抗日路線から逼蔣抗日路線への転換を加速させた。西安事変の裏にあった胡愈之の一連の動きも見逃せない。

逝去後の魯迅に関連する胡愈之の重要な功績は、日本占領下の上海で『魯迅全集』（一九三八年）の編集、出版に尽力したことである。これは魯迅研究史上、特筆に値する。

魯迅との関係はおおよそ以上のようなものだが、その後の胡愈之についても簡単に紹介しておく。

一九三八年五月、国共合作下で軍事委員会政治部第三庁第五処処長として武漢に赴き、抗日文化活動に従事、武漢陥落後は桂林で活動を続ける。一九四〇年十二月、シンガポールに行き、『南洋商報』主編として華僑界での宣伝工作、組織化を担う。一九四二年日本軍の侵攻を避け、夫人沈茲九、郁達夫らとスマトラに逃れ流亡生活をおくる^⑬。抗日戦勝利後、シンガポールに戻り、『南僑日報』創刊、海外における中共の宣伝、統一戦線工作に貢献した。一九四八年八月香港を経て大連に入り、党ルートを通して毛沢東に国共内戦の情勢分析を進言、毛沢東はこれを受けて「中国軍事形勢的重大変化（中国の軍事情勢の重大な変化）」（一九四八年十一月）を書いた^⑭。新中国建国後は、『光明日報』編集長、国家出版総署署長、中国文字改革委員会副主任、文化部副部長、中華全国世界語協会理事長、第一〜五期全人代常務委員、第六期同常務副委員長、第二〜四期全国政協委員、第五期同副主席、中国民主同盟中央副主席、同主席代理、などの要職を歴任、魯迅研究会顧問、魯迅生誕百周年記念委副主任委員も務めた。

文革中は失脚は免れたものの民主の蹂躪を嘆き、被迫害者の救済に奔走し毛沢東との会見を求めたが実現しなかったという。そして北京での念願の世界語協会第七一回国際大会開催を半年後に控えた一九八六年一月、胡愈之は九十年の生涯を閉じた。エロシエンコを上海に迎える一九二〇年代初から晩年に到るまで続いた日本人エスペランティストたちとの交流も忘れることはできない^⑮。

二、胡愈之、魯迅にソ連での療養を説得

一九三六年初、ソ連での療養を招請するという在モスクワ駐コミンテルン中共代表団の指令を胡愈之が魯迅に伝

える役回りとなったのは、従前からの魯迅との特別な関係に加え、一九三三年に胡が中共の秘密黨員になっていたからにほかなるまい。

胡愈之と最晩年の魯迅との関係は、政治的には中国民権保障同盟の運動を軸として見ることができる。四・一二クーデタ後、国民党の共産党に対する苛烈な弾圧が続き、一九三一年には「危害民国緊急治罪法」が公布され、翌一九三二年には特務機関「藍衣社」が成立、日本の中国侵略という情勢の中でも共産党及びその周辺の人々への国民党の弾圧は猖獗を極めた。そうした国民党によって逮捕された政治犯の救援、人権保障要求を目的に設立されたのが民権保障同盟である。陳漱渝によれば、民権保障同盟は一九三二年の夏から秋ごろの時期に準備され、同年末に正式に発起、一九三三年一月に上海、北平分会が成立、魯迅はその会員章から一月十一日に正式に入会、十七日に上海分会の執行委員になっていたことがわかるといふ。会長（あるいは主席、呼称は一定しない）は宋慶齡、副会長は蔡元培、総幹事は楊杏佛（楊銓）であった。宋慶齡の回憶によれば魯迅は宋の要請によってこの同盟に参加したようである。魯迅は会議にも度々出席し、熱心に同盟の活動に関与していた。¹⁴

胡愈之はこの同盟に参加したのは魯迅の要請によるものだったと証言している。

私は魯迅の招請で民権保障同盟に参加しました。それは一九三三年初のことです。魯迅は周建人に、私と鄒韜奮と一緒に中央研究院分院に会議に来るようことづけたのです。¹⁵

胡愈之はまた民権保障同盟と、その創設以前の一九二六年に成立し活動していた中国済難会（後に中国革命互済会と改称）との関係について、一九七八年に陳漱渝の書信での質問に、馮雪峰からの伝聞を根拠にこう答えていた。

民権保障同盟は間違いなく党外のフロント組織でした。私が当時知っていたところでは、それはコミンテルンが組織した国際的大衆組織で、中国語訳で済難会というのは、各国の政治犯を救援するために作られたものです。大衆の基礎は各国の労働者でした。上海に早くからあつた済難会組織は完全な秘密組織でした。民権保障同盟は済難会の一支部であり、公然の合法的上部組織で、英米仏などのラッセル、バルビュス、アインシュタインら著名な知識人から構成される類似の組織と関係がありました。⁽¹⁶⁾

馮雪峰も済難会についてこう証言している。

赤色済難会は本部がパリに置かれていました。十月革命後、コミンテルンの發議でできたものです。

中国の済難会（互済会ともいう）は国際本部の支部で、党が指導、支持し、最も広範な全シンパサイザーと連携していましたが、白色テロのため、その組織と活動はすべて秘密とされました。本部（国際支部の本部）は上海に置かれ、「中国」各地区にさらに支部がありました。魯迅が一九二七年に上海に来ると、上海済難会は魯迅と連絡するために人を派遣しましたが、魯迅は何度か、少なからぬ金額をカンパしたことがあります。⁽¹⁷⁾

一九二六年に成立し、活動していた中国済難会（のち、中国革命互済会）はコミンテルン指導下の国際的組織である赤色救援会（日本での通称は国際革命運動犠牲者救援会を意味するロシア語の頭文字をとってMOPR＝モツプル、英語ではIRA＝International Red Aid⁽¹⁸⁾、中国語では国際紅色救済会⁽¹⁹⁾）の一支部であり、国民党の弾圧下に

おいて活動が困難となり、より政治色の薄い救援組織が必要になったと考えられる。おそらく、民権保障同盟成立後は胡愈之の言うような公然・非公然二重の関係が済難会との間にあったのであろう。

周知のように、民権保障同盟は一九三三年六月、総幹事の楊杏佛が暗殺され、魯迅、蔡元培、宋慶齡らにも危険が迫る中、活動停止を余儀なくされた。済難会もこの後、国民党によって壊滅に追い込まれた⁽²⁰⁾。

こうした命がけの活動の中で、魯迅と胡愈之は政治的立場や思想面での相互理解をそれまで以上に深めていったであろう。

さて、この民権保障同盟が活動停止に追い込まれた直後の一九三三年九月、胡愈之は中共の秘密黨員になる。一で触れたように、中共中央特科直属の特別黨員として迎えられた胡愈之は情報仕事を主要任務とし、共産黨員としては決して表に出ないものとされ、党内でも党中央、中央特科以外は胡愈之が黨員であることは知らなかった⁽²¹⁾。しかし、陳漱渝は胡愈之の口から直接聞いたところを、次のように記す。

胡愈之は一九三三年に秘密裏に「中共に」入党した。魯迅は胡愈之と党の関係を知っていた。お互いの安全のために胡愈之は魯迅の家には終始行ったことがなかった。用事があると、宋慶齡の家に行って話すか、周建人を通じてことづけした⁽²²⁾。

魯迅は胡愈之の中共黨員としての事情を知る例外的な人物だったということである。これは魯迅と胡愈之との師弟関係という特別な背景と胡愈之が中共黨員として主要任務とした情報、統一戦線工作の都合上、中共中央や中央特科が魯迅への事情説明を胡愈之に認めたということであろう。

こういう経緯があつて、一九三六年初、胡愈之は魯迅にソ連行きを説得するのであるが、この間一九三五年夏ごろには胡愈之の関わる生活書店と、同書店が刊行し魯迅が編集者を務める雑誌『訳文』との間に衝突が起つていた。一九三五年九月二四日付魯迅の黄源宛書信などから、胡愈之は魯迅と生活書店の鄒韜奮との間に立つて中々難しい立場にあつたことがわかるのだが、その対応から胡愈之が統一戦線工作における同志鄒韜奮の役割を重視していたことが窺える。おそらく、魯迅はその辺の事情もすべて知つた上で「教え子」胡愈之と付き合っていたのである（因みに一九三六年魯迅逝去直前に上巻が出た魯迅編になる瞿秋白の翻訳遺稿集『海上述林』刊行にも胡愈之は協力している²³⁾）。

一九三三年十一月、胡愈之が関わる生活書店の雑誌『生活』週刊が反蔣抗日を訴えて国民党から發禁処分を受けると、胡愈之らは後継誌として民族資本家杜重遠を出版責任者とする『新生』週刊を出すことになる。この『新生』が一九三五年五月、天皇を侮辱したとして日本から抗議を受け、国民党は出版責任者杜重遠を逮捕、懲役刑に処すという所謂「新生事件」が起こる。東北軍と関係の深かった杜重遠の情況に張学良らは関心を示し、その関係者が上海の杜の服役先に面会に訪れるが、そこで張学良が中共との連合を希望していると聞きつけた胡愈之は、中共上層部にこの情報を伝えようとするものの、上海の共産党組織は壊滅しており、党中央との連絡は途絶えていた。胡愈之の単線連絡先である宣侠父はこの時、香港に移つて華南工委書記を務めており、有事に関する予てからの指示通り胡愈之は上海を出て同年十二月十日前後に香港に到着、宣侠父に直接情報を伝えた。当時在モスクワの駐コミンテルン中共代表団との連絡は、パリで中共（つまり王明ら）が出していた『救国時報』編集部を経由するほかなく、宣侠父はこの情報の重要性に鑑み、胡愈之をパリ経由でモスクワの中共代表団に直接報告に赴かせることを決めた。すると中共代表団は胡愈之の派遣に同意の返電を送つてくるとともに、魯迅を病氣療養のためソ連に招請

すると言ってきたのである。²³

『魯迅研究資料 1』所載胡愈之・馮雪峰談「談有関魯迅の一些事情（魯迅に関するいくつかの事柄について）」の「三、一九三六年二、三月魯迅沒有接受去蘇聯休養的情況（一九三六年二、三月魯迅がソ連に療養に行くのをこたわった情況）」に拠れば、モスクワの中共代表団は胡愈之に、魯迅に付き添って香港まで連れてくるように指示し、香港からモスクワまでは党が責任を持つとした。そこで胡愈之は翌一九三六年陰曆の正月初め、再び上海に戻り魯迅を訪ねるのである。因みにこの年の春節は新曆の一九三六年一月二四日に当たる（『新編万年曆』、科学普及出版社、一九八八年に拠る）。『魯迅日記』同月二九日の条には確かに「明甫「茅盾」来る、「昼」食後ともに越之「愈之」を訪ねる」とある。そして胡愈之はこの時の会見を次のように語っていた。

私は上海に行き、北四川路のとあるレストランに魯迅を招いて会い、ソ連からの招請を告げるとともにモスクワへの交通事情も話した。魯迅は言った。「ソ連の友人たちの好意には大変感謝しますが、私は行きませんよ。ソ連の友人たちはただ単に、私には療養が必要だし、国民党が私を狙っていて危険な境遇だからソ連に来れば安全だ、と心配してくれているということでしょう。しかし、私の考えは違います。私は五十歳を過ぎている、人はどうしたってかならず死ぬものと決まっています、死んだとしてももう短命という年ではなし、病気もそう深刻ではありません。私は上海に住み慣れていて離れるのは難しい。それに、私はここでまだ闘わなければなりませんし、任務もあります。ソ連に行ってしまったら、任務を全うできません。敵は私をやっつけることはできません。私が見るに、この戦いは私が勝利し、敵は敗れたのです。私を捕まえて殺す以外に、敵にはほかのやり方はありませんが、思うにそれは無理です。私は年ですから、私を殺したところで、私には

何の損害もありませんが、敵の損失は小さくないし、負うべき責任も大きい。敵が一日私を殺さないでおけば、私は一日筆で闘える。私の方は敵を怖いとは思いませんが、敵は私を恐れている。私が上海を去ってモスクワに行けば、敵を喜ばせるだけです。どうかソ連の友人たちに、好意には感謝するが、私はやはり行かない、と伝えてください」と。少しして、魯迅はこうも言いました。「国民党も帝国主義も、恐るるに足らずですが、一番憎らしいのは、わが陣営内の害虫たちです」と。魯迅は誰とは言いませんでしたが、当時党内に現れた叛徒や日和見主義者たちが陰で魯迅を攻撃していることを指しているのは明らかでした。

私が魯迅と話したのはこの一度だけです。私は魯迅がソ連には断じて行かないということが分かったので、それ以上魯迅を訪れて話すことはせず、香港に戻りました。

魯迅をソ連に招請する話はこれ以前にもまたこれ以後にもあったのだが、結局魯迅はスターリンのソ連、王明のいるモスクワに行くことはなかった。

ところで、ここで魯迅が言う「わが陣営内の害虫（自己営壘裏的蛀虫）」とは「当時党内に現れた叛徒や日和見主義者たちが陰で魯迅を攻撃していることを指しているのは明らか」だったと胡愈之は説明しているが、筆者はこの言葉から瞿秋白夫人楊之華が馮雪峰に語ったという魯迅の言葉を思い起こさざるを得ない。

一九三四～一九三五年の間、楊之華は魯迅のところに行つて文書に署名してもらおうとしたことがあったが、魯迅は初め署名に応じようとはせず、ひどく怒つて周揚らのことを持ち出して、「こういう黨員たちを君たちはどうして追い出さないんだ」というような意味のことを言った。⁽²⁶⁾

三、なぜ魯迅はソ連に行かなかったのか？

一九三六年、中共・コミンテルンルートとのソ連への療養招請を魯迅が謝絶した理由を胡愈之は魯迅の言葉「私は五十歳を過ぎており、人はどうしたってかならず死ぬものと決まっていますが、死んだとしてももう短命という年ではなし、病気もそう深刻ではありません。私は上海に住み慣れていて離れるのは難しい。……私の方は敵を怖いとは思いませんが、敵は私を恐れている。私が上海を去ってモスクワに行けば、敵を喜ばせるだけです」を引用して説明したが、胡愈之の友人、金城は『胡愈之印象記』（中国友誼出版公司、一九八九年）所収の「党的堅強戦士（党のゆるぎない戦士）」でこんなことを書いていた。

このほか、魯迅は新聞でスターリンが肅清を拡大していることを知っており、そうした時期に魯迅がソ連に行くのは不都合「原文…不合適」だったのである。

金城は実は胡愈之が一九三五年末、単線連絡先である宣侠父を香港に訪ねた当時、宣侠父のもとで、胡愈之を接遇した人物である。このときのソ連への魯迅招請の経緯をよく知る当事者の一人と言える。この香港での出会いから始まる胡愈之、金城二人の交流は新中国成立後も中共中央統一戦線部と中国民主同盟の仕事を通じて続いている。金城は新中国で中共中央統一戦線工作部副部長、文革後は全国政協常務委員、中共中央統一戦線工作部顧問等を歴任している。その著『延安交際処 回憶録』（中国青年出版社、一九八六年）の「後記」を見ると、金城

は香港から延安に赴き、一九三七年末から一九四七年春まで延安の「交際処」で統一戦線工作に当たっており、毛沢東とも接触の機会があった。

さてこの金城の一文について、筆者は一九九〇年に以下のように書いたことがある。²⁹⁾

「不合適」というのは金城の判断のみならず魯迅の当時の認識でもあったはずだが、魯迅が何故スターリン肅清期にソ連に行くのを「不合適」と思ったのかは考えようによっては中々に、意味深長である。単に肅清の騒動の渦中に行くのは病気にもよくない（不合適）し、また落ちつかない（不合適）と取ることもできる。しかしまた、もう少し政治的に考えることもできない訳ではない。魯迅はスターリンに好意を持っていなかったのではないか。それなのにソ連に行けば全面的ソ連礼賛者に仕立てあげられ、ソ連及びスターリンに対する批判の自由を失う、そのことを「不合適」と考えたのだと。魯迅のスターリンについての言及は『魯迅全集』中、馮雪峰執筆の「答托洛斯基派的信」「トロツキー派に答える手紙」以外にはただ一箇所『訳文序跋集』所収の「『一天的工作』後記」に於いてのみのものである。こんな具合だ。

「マラーシキン著『右側の月』所収の短編小説「労働者」では³⁰⁾レーニンを描写した数カ所は、達人のスケッチ画のようで、すこぶる生き生きとしている。また、あまりロシア語がうまくしゃべれない男が出てくるが、おそらくこれはスターリンであろう。〈というの彼はGeorgia、つまり『鉄の流れ』の言うグルジア生まれだからである。〉

レーニンやトロツキーに対する書き方、言及の頻度等と比較しても魯迅のスターリンに対する冷淡さは可成明瞭ではないか。

また、もう一つの見方として、「国防文学論戦」とも絡んで魯迅は周揚らからトロツキスト呼ばわりされるような状況がこの前後に現出するが、その魯迅がソ連に行った場合、自らも粛清の危険に晒されることを恐れたと考えられないだろうか。二〇年代後期の革命文学論戦で魯迅が盛んにトロツキーの文学論を援用したことを周揚ら同時代の文学者はよく知っていたに違いない。その魯迅が今度は左連の解散に反対し、政治的組織論的に「トロツキスト的」敵対を露わにしてきたと周揚らが考えたとしても一面無理からぬ状況があつたのではないか。そして魯迅もそうしたことに気づいていたとすれば、一九三五年のジノヴィエフ、カーメネフの逮捕〔実際には逮捕は一九三四年末⁽²⁾。一九三六年八月処刑〕に象徴的な血の粛清の拡大化が、訪ソすれば自らにも及びかねないと、彼は危惧を抱いたのかもしれない。

〔「」内は今回引用するに当たつての長堀補注、へへは同じく魯迅テキストの補充。一部表記を変えた部分もある〕

これを裏付ける資料が金城の著から十数年を経た二〇〇二年に発表された。嚴家炎著「東西方現代化的不同模式和魯迅思想的超越（現代化モデルにおける東西の差異と魯迅思想の超越）」（『東方文化』二〇〇二年第二期）である。嚴家炎によれば、胡愈之の上記インタビュー「一九三六年二、三月魯迅没有接受去蘇聯休養的情況」は、『魯迅研究資料 1』に収録されるに際し、実は一部削除されており、削除部分には以下のような、魯迅の肉声を伝える胡愈之の言葉と、これに対する胡愈之自身の解釈があつたことが明らかにされた。

それから魯迅はまたこう言いました。「ソ連の国内状況がどのようなのかも、私はちよつと心配です。やはり、自陣内部で問題が起きているではありませんか」と。魯迅が言うのは、当時スターリンが肅清を拡大させていて、西側の新聞・雑誌がこれを大々的に宣伝していたため、魯迅はちよつと心配だったのです。これも魯迅がソ連に行こうとしなかった原因の一つです。⁽³³⁾

実際、日本の新聞、雑誌のみならず、中国でも『東方雑誌』や『申報』は一九三四年十二月のキーロフ暗殺に端を発したソ連で進行中の大肅清を逐次報道していた上、『申報』掲載の一連のスターリンによる大肅清報道の中には胡愈之自身が編訳したであろうアヴァース通信配信の記事もあったのである。⁽³⁴⁾ 胡愈之自身もソ連の情況は熟知していたからこそ、魯迅の謝絶に対して「私は魯迅がソ連には断じて行かないということが分かったので、それ以上魯迅を訪れて話すことはせず、香港に戻りました」とあつさり引き下がったではないか。あるいは胡愈之自身が魯迅に積極的に同調した、もしくは行かないよう勧告したという推測すら成り立つかもしれない。

さらに、魯迅はスターリンのみならず、モスクワの駐コミンテルン中共代表团王明を忌避していたとも考えられ、そのこともソ連行きを拒絶した理由の一つに加えられるだろう。王明はスターリン直系の手下であり、魯迅と交友を結ぶ以前の瞿秋白を党中央から排除したばかりか、魯迅の愛弟子とも言える柔石らが、中共の党内闘争の最中に国民党に逮捕処刑された際、これが柔石らと対立する王明らの密告に起因するという噂がその直後からあったのである。李海文著「東方旅社事件」(『魯迅研究月刊』一九九七年第三期)に拠れば、一九三一年一月柔石らが出席を予定していた王明らの党中央に反対する会議について、上海国民党市支部、上海共同租界工部局へ、中共の重要会議が

開催される旨の匿名の密告があり、工部局内に潜伏していた中共特科部員（諜報員）がこの密告の事実を中共組織に通報したが、王明らは党内反対派に対する国民党の弾圧を座視、黙認したという。密告者が誰なのか明確な証拠はないとのことだが、王明周辺という噂は絶えず、状況証拠は限りなく黒に近い。トロツキスト王凡西も当時からの密告が王明たちによるものとの噂があり「この種の卑劣な行為はスターリン―陳紹禹〔王明〕の精神に符合するが、結局確実な証拠はなく、断定は難しい。ただこれが党内の熾烈で残酷な闘争が惹起した悲惨な出来事であったことは否定しがたい」と書いてある。当然、柔石らの逮捕時に自らも避難を強いられながらも、彼らの身の上を案じ、訃報を聞いてからは彼らを追悼する文章「為了忘却的記念（忘却のための記念）」（『南腔北調集』所収）などを書いた魯迅の耳にもこの噂は様々なルートから入っていたに違いない。瞿秋白や馮雪峰からも王明らのことは聞いていたろう。魯迅が王明らのソ連招請を断る際に胡愈之に言った言葉、「一番憎らしいのは、わが陣営内の害虫たちです」の「害虫たち」の中に、党内反対派抹殺には国民党の弾圧をも利用して恥じない王明らも含まれていたとすれば、こうした輩からの招待を魯迅は端から受けるはずがなかったと考えるのが自然ではないか。

魯迅が胡愈之によるこのソ連招請を謝絶した半年ほどあとのこと、結局は病気の悪化で実現はしなかったものの、内山完造や須藤五百三たちも魯迅に療養のため、雲仙や鎌倉へ行くことを勧めたことがあった。魯迅も「多少は考えてもいいという気になっていたようだ」という。近年発見された瞿秋白未亡人楊之華宛書信（一九三六年七月十七日付）で魯迅は、当時コミンテルンと中共の人民戦線戦術への方向転換に呼応して左連を解散し、「国防文学」を叫ぶ周揚らの対応に不満をあらわにしつつ「今月末か来月初から、上海を二、三カ月離れ、転地療養します。ここにいたら本当に殺されます」と書いており、この手紙を別刷の附録として緊急掲載した『魯迅研究月刊』（二〇〇三年第六期）の陳漱渝の注は「魯迅は日本の長崎に短期療養に行こうとしたことがある」と記す。この時の魯迅

の日本での療養計画については、黄源も『魯迅先生』の中で「魯迅はもと七、八、九月の三カ月間、日本に療養に行くつもりだった」と証言し、魯迅の同年八月二日付茅盾宛書信も「以前は日本に行くことに決めていました。が、……なお、考慮中です」としていた。増田らの証言はこの楊之華宛ての魯迅書信によってさらに裏付けを得たと言える。逝去一カ月前の九月十八日付許傑宛書信で魯迅は「日本に療養に行く予定もないのに、日本の新聞はなんと私が日本にもうすぐ行くと書いています。どういうことでしょう。中国の新聞にも載るとすれば、それは日本の新聞の受け売りです」とも書いているが、確かに、同年の七月二一日付の読売新聞には「魯迅氏来朝せん」という記事がある。魯迅最晩年の日本での療養の実現可能性はかなり高かったと考えるべきであろう。そして、ソ連行きを断つた後の魯迅が、短期とはいえ日本での療養を計画していたという事実からは、魯迅のソ連や在モスクワ中共代表団に対する、言いかえればスターリン⇨王明に対する危惧や警戒心、少なくとも違和感が極めて強かったことが窺えるのである。一九三五年末、魯迅に左連解散の指令を送ってきたのも駐モスクワ中共代表団代表王明であったことを私たちは容易に想起できるであろう。⁽⁴⁰⁾

結び

魯迅の愛弟子、胡愈之はこうして最晩年の魯迅と、自らが中共秘密黨員であるという厳秘事項を明らかにしつつ交流を続け、民権保障同盟とともに担い国民党の白色テロと戦ったばかりでなく、魯迅がソ連に行くことを最後まできっぱり断つたことを証言し、結果としてスターリンのソ連に対する魯迅の危惧をも歴史に書き残したのであった。胡愈之はまた魯迅逝去に際しては反蔣抗日から逼蔣抗日へと路線転換中の中共の方針に従い、胡風、蕭軍ら言

わば魯迅直系の文学方面の愛弟子たちを押さえ、救国会を前面に押し出してその葬儀を取り仕切った。魯迅の棺にかけられた「民族魂」の旗幟は果たして国際主義者魯迅の意志と合致したかどうかは別として、胡愈之がその延長線上で果たした中国革命の関頭における幾つかの重要な役割についてはさらに研究が進められるべきであろう。¹⁴⁾

注

(1) 『胡愈之文集』第六卷 三五七―三六〇頁参照。胡愈之の最晩年の回想インタビュー「私の回想(私の回想)」に拠れば、このころの事情は大方以下の通り。一九三六年五月、モスクワの駐コミンテルン中共代表団への報告(本文後述)を終えた胡愈之は潘漢年を伴って香港へ戻るが、この後、胡愈之は潘漢年の直接の指導下で複雑な統一戦線工作を担当することになり、「以後、君は救国会のことだけやってくれ、ほかのことはかまうな」と言い渡される。そして陝北から上海に出てきた馮雪峰から、六、七月頃連絡を受け、香港から上海に向かう。上海では日中全面戦争突入まで、従前通りアヴァース通信社の仕事を続けるが、潘漢年の指導下で抗日救国運動に傾注した(上海各界救国連合会は同年一月、全国各界救国連合会は五月三十一日―六月一日にそれぞれ成立、その中心勢力は中共地下党委員と国民党反蔣派であった。なお、包子桁著『雪峰年譜』上海文艺出版社、一九八五年、や張雲著『潘漢年伝』上海人民出版社、二〇〇六年、などは『新文学史料』一九八二年第四期所載の馮夏熊著「馮雪峰回憶中的潘漢年」に拠り、馮雪峰が香港へ六月中旬に向いて潘漢年と会見し、すぐに上海に戻ったとするが、胡愈之の回想は潘・馮二人の会見場所を香港と特定してはいない。陳早春・万家驥著『馮雪峰評伝』人民文学出版社、二〇〇三年も、この時期の馮雪峰の香港行きには触れていない。馮雪峰は六月九日と十日付で、魯迅作とされてきた「トロッキー派に答える手紙」と「現在の我々の文学運動について」を執筆しているが、その直後に香港に行きとんぼ返りしたということか。物理的に可能だったのか疑問が残る)。

一九三六年十月十九日の魯迅の逝去を、胡愈之は馮雪峰からの電話で知る。馮雪峰は魯迅の葬儀は救国会が前面に

出て組織するのが適当であり、胡愈之が救国会との折衝に当たるように指示した。そこで、胡愈之は沈鈞儒ら救国会の指導者と会い、魯迅の葬儀は上海救国会が主催し、大衆的政治的デモンストレーションを發動して抗日救国運動の高揚を図ろうと取り決めたという。胡愈之のこの証言は、孔珠海著『魯迅―最後の告別』（人民文学出版社、二〇一一年）が引く唐毅や周建人の長女周暉らの、馮雪峰は葬儀を全面的に指揮してはならず、葬儀は上海救国会が大きな役割を果たした、という証言とも符合する（同書二九～三二頁）。つまり、当時の中共の方針、指示を現場で推進したのは胡愈之だったということである。もともと、魯迅逝去翌日の一九三六年十月二十日付で書かれた胡愈之の魯迅追悼の文章「魯迅―民族革命的偉大闘士」（ここでは『胡愈之文集』第三卷四八一～四八三頁に拠る。初出は『生活星期刊』とあるが、管見の限りでは同誌には見当たらない。ここでは当時当該誌あるいは別メディアに公刊されたものとして行論する）は、当時の中共の統一戦線政策に沿って魯迅を「中国の最も偉大な民族作家」と強調しているが、一方では「民族思想家」と「国際主義者」が魯迅においては統一されているとの指摘も忘れていないことは留意されるべき点だ。魯迅をよく知る胡愈之には「民族革命の闘士」に止まる魯迅像は不十分だったということだろう。「国際主義者」という魯迅評価・魯迅規定は当時の魯迅追悼の文章ではあまり見かけないもので、胡愈之の優れた洞察力を示している。なお、胡愈之のこの「我的回憶」に拠れば、馮雪峰は反右派闘争で、一九三六年に陝北から上海に戻った際、中共党員ではなく魯迅、胡愈之という非党員をまず訪ねたことが罪状の一つに挙げられたが、胡愈之が秘密党員であったことを公にすることはできず、反論できなかつたという。胡愈之が秘密党員だったことを明らかにするのは一九七九年のこと（我所知道的馮雪峰「私が知っている馮雪峰」、『胡愈之文集』第六卷所収、二二五頁）。

(2) 『胡愈之文集』第六卷所収「我的回憶」、三二八頁。なお、「我的回憶」は一九八五年、つまり最晩年の胡愈之の口述であり、それ以前の彼の他の著述と細かい点で食い違ふところもあるので、使用に際しては他資料との照合等の手続きが必要だ。

(3) 『胡愈之文集』第六卷、二六一頁。初出は『中学生』第十六期、一九三一年六月。なお、魯迅は光復会には加入していたが、同盟会には加入していない。これ以下引用訳文中の「」は長堀訳注を表す。

- (4) この段の引用は前注3に同じく『胡愈之文集』第六卷、二六一～二六二頁。
- (5) 朱順左著『胡愈之』（花山文芸出版社、一九九九年）、三三頁。
- (6) 陳原著『記胡愈之』（北京三聯書店、一九九四年）第三章「愛羅先珂」等参照。
- (7) 『胡愈之文集』第六卷所収、「我的回憶」三三六～三四二頁。
- (8) 杜重遠については、下出鉄男著「流亡の民族資本家―杜重遠について」（魯迅論集編集委員会編『魯迅と同時代人』、汲古書院、一九九二年、所収）ほか、参照。
- (9) 宣侠父（一八九九～一九三八）。中央特科指導部の一人。当時、華南工委書記として香港で活動していた。後、西安に行き、国民党との統一戦線工作で功績をあげるが、逆に国民党の怨みを買ひ、暗殺された。
- (10) 『胡愈之文集』第六卷所収、「我的回憶」三五四～三五五頁、及び胡愈之・馮雪峰談「談有関魯迅的一些事情」（一九七二年談）（魯迅研究資料 1）、爾雅社出版、一九七九年、所載）の「三、一九三六年二、三月魯迅没有接受去蘇聯休養的情況」に拠る。
- (11) 『南洋商報』はシンガポールの「ゴム華僑王」と呼ばれた「愛国華僑」陳嘉庚（一八七四～一九六一、新中国では全人代常務委員、全国政協副主席など歴任）が一九二三年に創刊した新聞。華僑による抗日戦協力の動きについては菊池一隆著『戦争と華僑』（汲古書院、二〇一一年）がある。また、この時期の郁達夫に關して胡愈之は『郁達夫の流亡と失踪（郁達夫の流亡と失踪）』を書いてゐる。郁達夫が日本憲兵によつて終戦後（日本敗戦後）に殺された経緯については鈴木正夫著『スマトラの郁達夫』（東方書店、一九九五年）参照。
- (12) 最近、『毛沢東選集』全四巻に収められた百六十編のうち、十二編以外は毛沢東の執筆ではないとの指摘が出て論争になつてゐる。唐宝林著「官越做越小的吳亮平」（『炎黄春秋』二〇一一年第九期）が、中共中央文献研究室、同党史研究室、同党校が連名で中共中央書記処に提出したとされる「關於『毛沢東選集』中著作原稿的審核、考証意見」を引いてこのことを指摘したところ、閻長貴著「毛選」文章不是毛沢東写的嗎？」（同第十期）がそのような報告書自体が存在しないとの反論を書いている。一九八一年六月の「關於建国以来党的若干歷史問題的決議」は、毛沢東思想

は「実践によって正しさが立証された中国革命の正しい理論的原則と経験の総括であり、中国共産党の集团的英知の結晶である。わが党のすぐれた指導者は、みなそれらの形成と発展に重要な貢献をしてきたが、毛沢東同志の科学的著作はその集中的な概括である」としている。毛沢東思想が集团的英知である以上、『毛沢東選集』の諸編が毛沢東個人の執筆でなく、単に毛が校正の上、承認を与えただけのものだとしても、これはある意味で驚くに当たらない。この決議自体が、毛沢東周辺の幹部、秘書らが起草に従事していたことを暗示している。ただ、毛沢東自らが起草・執筆した文章の割合がこれほど少ないとなると、毛沢東の権威の問題につながるといふことだろう。「中国軍事形勢の重大変化」〔毛沢東選集〕第四卷所収〕が胡愈之の起草なのかどうかについては未詳。

(13) 山田辰雄編『近代中国人名辞典』(霞山会、一九九五年)所載「胡愈之」の項(長堀執筆)及び拙論「胡愈之についての二、三のこと」(『療原』No.35、一九九〇年)参照。

(14) 陳漱渝著『魯迅史実新探 増訂本』(湖南人民出版社、一九八二年)所収「魯迅与中国民権保障同盟」(初出は『魯迅研究資料 4』、天津人民出版社、一九八〇年)。なお、朱正著『魯迅回憶録正誤(増訂本)』(人民文学出版社、二〇〇六年)は近年の歴史研究の成果を踏まえ、民権保障同盟設立の真の狙いが、一九三一年六月に公共租界警察に逮捕され、その後国民党に引き渡されて南京監獄にあったコミンテルンの重要工作員ニューラン夫妻救援にあつたと言う。宋慶齡、ゾルゲ、潘漢年、オットー・ブラウンらも夫妻の救援に関与した。同書一八四―一八九頁参照。

(15) 『胡愈之文集』第六卷所収、「我的回憶」三四四頁。

(16) 費孝通・夏衍等著『胡愈之印象記』、中国友誼出版社、一九八九年所収、陳漱渝著「数通書簡 一席交談」、同書二八八頁。

(17) 胡愈之・馮雪峰談「談有關魯迅的一些事情」の「二、互濟会(即濟難会)」。

(18) *Biographical Dictionary of the Comintern*, by Branco Lazitch & Milorad M.Drachkovitch の日本語版『コミンテルン人名事典』(至誠堂書店、一九八〇年)に拠る。

(19) 「新発現的魯迅書簡 致楊之華」〔魯迅研究月刊〕二〇〇三年第六期付録)に拠る。

(20) 人民文学出版社、二〇〇五年版『魯迅全集』第十六卷「日記」卷四四頁注10。

(21) 『胡愈之文集』第六卷所収、「我的回憶」三四七頁。

(22) 前掲注16に同じ。同書二九〇頁。なお、この引用部の言うような（及びそれ以前も含め）安全上の問題から処分されたためであろうが魯迅・胡愈之間の書簡は『魯迅全集』や『魯迅蔵同時代人書信』（張傑編著、大象出版社、二〇一一年）には収録されていない。

(23) 『魯迅全集』第十四卷、一九三六年十月十五日付「致台静農」及びその注2。

(24) 『胡愈之文集』第六卷所収、「我的回憶」三四七～三四四頁。王明のこの件に関する回想証言は次の注25の(3)参照。

(25) ここで主として朱正『魯迅回憶錄正誤（増訂本）』の二つの章「関于魯迅与李立三的会见」、「関于1936年的那次訪蘇邀請」が挙げる関連資料を参考として幾つか招聘の例を紹介しておく。

(1) 「訪問蕭三同志記錄」（『魯迅研究資料』4 天津人民出版社、一九八四年。文責署名無し、同誌編集部の一九七九年九月の蕭三に対するインタビュー）が触れるソ連招聘について。

本編の「二、関于邀請魯迅赴蘇問題」で蕭三は、一九三四年七、八月第一回ソ連作家代表大会がモスクワで開かれたが、その準備段階で主催者の意を受け魯迅に参加要請の手紙を送ったものの、実現しなかったとする。これは『魯迅書信』一九三四年一月十七日付蕭三宛に扱れば、蕭三が一九三三年十一月二四日付で魯迅に出した書信のことである。魯迅は蕭三の大会への招聘に「現在の状況では家を離れるのは難しい、……。やはりこのまま、ここで文章を書いていた方がましでしょう」と謝絶している。蕭三はまた、魯迅が一九三二年にソ連の招待で觀光と休養の旅行を計画していたとも書いている。なお、本インタビューの「一、関于写信回国問題」で蕭三は、一九三五年九月に王明から左連解散方針を通告され（蕭三は駐モスクワ左連代表として当地に滞在していた）、解散指示の手紙を本国（上海）に書くように命じられた際の王明とのやり取りを紹介しており、ここでは王明が、左連は「極左「原文…太左」」で「セクト主義「同…関門主義」」であり、統一戦線に不利だという内容を話したとされる。インタビュー時期等の問題も勘案しないといけないが、周揚等の左連活動を王明が批判したのは、コミンテルンの人民戦線戦術への

「右翼的」路線転換と明らかに軌を一にするが、表面上これは魯迅の周揚等に対する不満とも一脈通じる（しかしその後、魯迅が左連解散に反対し、周揚等よりも本質的にさらに「左」だったことが判明したのは王明にとつて想定外だったろう）。そこからさらに言えば、王明の一九三六年春の魯迅への招請は反蔣抗日の幅広い統一戦線形成をも睨んだ魯迅獲得戦術の一環であったようにも見えてくる。これは本注の（3）でも触れる。

（2）スメドレーの魯迅に対するソ連療養勧告について。

『魯迅書信』一九三五年十月二二日付曹靖華宛は、一年間の（ソ連への）転地療養をすべきというスメドレーの勧めを棚上げして保留状態にしていると記す。その理由は「一、この病氣（胃病）は療養するまでもない。二、（行つたとして）帰国したら一層動きづらくなる」からで「私の現下の考えは行かない方に傾いている」と。スメドレー自身は「中国的戦歌『中国の歌ごえ』」の中で、魯迅の勧告謝絶の言をこう伝えている。

「魯迅はスメドレーが診察のために連れてきた米国人医師ダンの転地勧告を拒否して」「他の人が今まさに闘つて犠牲になっている時に君たちは私に一年ベッドで寝ていると言うのですか？」……ゴリキーは魯迅を自分のゲストとしてソ連に一年間招待しようとしたことがあったが、魯迅は行こうとしなかった。魯迅が言うに、国民党は中国中に魯迅は「モスクワでルーブルをもらっている」とわめきたてるだろうと。「……どうあるうと、中国は私を必要としています、私は行けない」……「どうしたって誰かが闘い続けなければならぬです」と。（『新文学史料』一九八〇年第三期所載「史沫特萊回憶魯迅」、二二二頁。訳は戈宝権。みすず書店一九七二年版高杉一郎訳『中国の歌ごえ』では八二頁）

『新文学史料』同期所載のスメドレー著傅東華訳「追念魯迅」（同誌一二七～一二八頁）や、許広平著『欣慰的紀念』所収「魯迅先生の娛樂」（ここでは魯迅博物館魯迅研究室『魯迅研究月刊』選編『魯迅回憶録』、北京出版社、一

九九九年、三九三―三九四頁)にも似たような記述がある。後者は一九三四年のソ連作家代表大会への招請問題にも触れ、茅盾と参加準備をしていたが準備時間が短く、病気もあり、実現しなかったと言うが、これは上記(1)の蕭三への魯迅自身の謝絶書信のニュアンスとは異なると言うべきだろう。

さらに、茅盾は「魯迅説…『軽傷不下火線!』」(上海文芸出版社編『魯迅回憶録一集』、一九七八年、三―五頁)で以下のように説明している。

一九三五年十月、ソ連での療養勧告を受け入れようとしないう魯迅を説得しようスメドレーから頼まれた茅盾は、魯迅宅を訪ねて説得を試みる。ソ連に行く決心がつかないという魯迅に茅盾が理由を尋ねると「ソ連に行ったら耳目も不自由になってしまう」からだと言語。「ソ連が通訳をつけてくれるでしょう」と茅盾が言うと、魯迅はそういうことではなく、「中国国内の事情がよくわからなくなってしまふということですよ」と言う。茅盾はそれなら中国の本や雑誌は最速の方法で全部送るから、中国国内で時を逃さず文章を発表できる、またソ連で中国の状況を世界にアピールできるなどとも説得するが、魯迅はそううまくはいくまいと、首を縦に振らないが熟考を約束する。一週間は、再び魯迅を訪れた茅盾に魯迅はこう言った。

私はじっくり考えたけれど、やはり行かないことにしました。少し前、敵は私が左翼文壇内部のもめ事に嫌気がさし、青島に一月余り行っていたとデマを飛ばしたことがあります。一方周揚たちはと言えば、なんとこのデマをさらに煽ったんですから。もし今ソ連に行ったら敵は思う存分デマをまき散らすんじゃないですか。私がこっそり敵前逃亡したと言うかもしれません。そうは問屋がおろしませんよ。私は上海で闘い続けます。

茅盾は魯迅の態度からその決意が固いことを悟るが、みなが魯迅の健康を心配していると最後に言う、魯迅は「疲れはどうしようもありませんが、皆さんが想像するほどの老衰多病というわけではありません。『かすり傷では前線を離脱しない』と言うじゃありませんか。私がかすり傷以上は本当にやっつけていけないと感じるまで、転地療養の話は

無しということにしましょう」と。茅盾は結局、説得をあきらめるほかないとスメドレーに告げたのであった。

(3) 許広平が語る陳銘枢による魯迅へのソ連療養勧告について

許広平著『魯迅回憶録』(作家出版社、一九六一年。ここでは上記北京出版社版『魯迅回憶録』専著下冊、一一七九頁)は、ある時(時期は忘れたとする)、香港の国民党側の陳某から「家族を連れすぐに香港に行き、それからソ連に行ってください」という手紙が内山書店気付で魯迅宛に届いたが、魯迅は国民党側の人間を嫌っていたからこの手紙を無視して焼き捨てた、という内容の記載がある。これに対して、朱正はまず王明著『中共50年』(東方出版社、二〇〇四年内部発行)を引く。

一九三六年晩春から初夏の頃、私「王明」は蕭愛梅「蕭三」のところで、魯迅の病気が重いことを聞かや、デIMITロフに魯迅をソ連に療養に招請するよう頼んだ。私たちは潘漢年をモスクワから上海に派遣し、私たちに代わって魯迅に、家族全員で訪ソするよう要請すること、同時にその旅行手配の責も負うことを命じた。潘漢年にはこうした並はずれて複雑な任務を遂行する能力があった。彼は魯迅たちが訪ソの旅程につくためのすべての準備を整えた。しかし、残念なことに、魯迅の健康状態がこうした長旅を許さなかった。(同書一八〇頁。なお、本書ロシア語版からの邦訳高田爾郎・浅野雄三訳『王明回想録』経済往来社、一九七六年、ではこの部分は「出版社の都合」で割愛されている)

そして、朱正は許広平がいう「陳某」とは陳銘枢のことであり、この招請は手紙ではなく、陳銘枢の代理人が直接魯迅に会って伝えたもので、許広平の回憶は誤りだとし、当の代理人胡允恭の回想録『金陵叢談』(人民出版社、一九八五年)を引いて、魯迅と胡允恭のやり取りを記す。胡允恭に拠ればこの会見時期は一九三六年初春のこと(王明の回想はやや時期がずれている)。魯迅の謝絶の言は大筋において上記(2)を出るものではなかったが、魯迅の陳銘

枢及びその代理人に対する態度は鄭重で、許広平の言う、国民党側の人間だから拒絶した、などというのも誤りだと朱正は指摘する。因みに許広平の『魯迅回憶録』は中共・毛沢東にすり寄った記述が多く、朱正の『魯迅回憶録正誤』はその訂正に主眼がある。また、二〇一〇年三月には許広平の同書「手稿本」許広平著・周海嬰主編『魯迅回憶録』(長江文芸出版社、印刷数は四万冊以上)が出たが、陳漱渝は、周揚指導下に編集・刊行された本書従来版が「左翼的」に改変されていたこと、及び朱正の従前からの批判が正しかったことを述べている。同時に、息子海嬰主編の「手稿本」の校訂の不十分性・不透明性も指摘していて興味深い(陳漱渝著「我読許広平『魯迅回憶録』手稿本」、『中国現代文学研究叢刊』二〇一一年第八期所載。この「手稿本」は手稿の影印ではなく通常の印刷で、問題個所について校訂注が施されているが、主編者の校訂注に恣意性があつたとしても読者は手稿そのものを見られない以上、それは確かめようがない。陳漱渝が言うのもそういうことであろう)。

ところで、上記王明の回想からは、在モスクワの中共指導部とコミンテルン側は陳銘枢、魯迅らを一九三六年初春当時の反蔣抗日を掲げる統一戦線の象徴としてソ連に招請しようとしていたと推測される。また、この回想からは潘漢年が陳銘枢、胡愈之という反蔣介石派の第三党と中共の二ルートで周到に魯迅を招請してことがわかる。

この頃の陳銘枢の中共との統一戦線を求める動きと在モスクワ中共代表団(王明代表)の対応については、『共産国際、連共(布)与中国革命档案資料叢書「コミンテルン、ソ連共産党(ボルシェビキ)与中国革命档案資料叢書」第15卷 共産国際、連共(布)与中国蘇維埃「ソヴェエト」運動(1931—1937)』(中共中央党史研究室第一研究部訳、中共党史出版社、二〇〇七年)で明瞭に見ることがができる。例えば、同書364「王明和康生関于抗日統一戦線問題的書面報告」「王明と康生の抗日統一戦線問題に関する書面報告」、367「中華民族革命同盟為同中共就建立抗日統一戦線問題進行談判提出的建議」「中華民族革命同盟が中共と抗日統一戦線について交渉を進めるために提出した意見」(中華民族革命同盟は一九三五年に香港で陳銘枢らが創立した反蔣抗日を主張する政治組織)、369「共産国際執行委員会書記処関于中共代表同陳銘枢談判的指示」「コミンテルン執行委員会書記処の中共代表団と陳銘枢との交渉に関する指示」、372「陳銘枢給中共中央委員們的信」「陳銘枢の中共中央委員たちへの書簡」等のドキュメントを参照。香港に

あつて反蔣抗日の立場から中共及びソ連、コミンテルンと統一戦線問題交渉中の陳銘枢はソ連、コミンテルン方面の自身及び魯迅に対する訪ソ要請を魯迅に伝えたのであつた。朱正も言うように、陳銘枢の魯迅招請の行動は政治的に十分合理性があるものであつた。また上記のような魯迅の胡允恭（陳銘枢代理人）に対する態度から考えるに、国防文学論争での魯迅の言動は、中共・コミンテルンの階級性を放棄した人民戦線戦術への転換に対する階級論者魯迅の抵抗であると同時に、その最終期においては反蔣抗日から遍蔣抗日へ舵を切ろうとしつつあつた中共・コミンテルンに対する抵抗や危惧もそこには含まれていたという見方もできるのではないか。

なお、上記364「王明和康生関于抗日統一戦線問題的書面報告」には、胡愈之の一九三六年のソ連行の目的が張学良の意向報告だつたことが明確に記されている。蛇足ながら、この『共産国際、連共（布）与中国革命档案資料叢書』全十六巻は、中国左翼文壇及び中共、コミンテルンの動向を同時並行的に見るときに大いに参考になるのではないかと期待される。

さらにここで一言付け加えると、上記朱正が引用する王明テクストの前後にも、王明の魯迅に対する言及がある（同書第四編第三節「毛沢東為什麼濫用和怎樣濫用魯迅的名義（毛沢東はなぜ、またいかに魯迅の名前を濫用したか）」参照）。左連期の魯迅、瞿秋白の活動に対する高い評価や、毛沢東による魯迅の政治利用、「人格化」に対する非難などが書かれていて興味深い。自らが党中央から追放・打倒した瞿秋白のことを「文学に造詣が深く経験豊富な瞿秋白が左連を指導した」とか、魯迅の愛弟子柔石を含む左連五烈士らを死に追いやった自分たちの所業を脇に置いて、毛沢東の魯迅利用を批判する王明の言葉に筆者はまったく説得力を感じることができない。

(26) 『雪峰文集』第四卷（人民文学出版社、一九八五年）所収「有関一九三六年周揚等人的行動以及魯迅提出『民族革命戦争の大衆文学』口号的經過」、同巻五一二頁。

(27) 『胡愈之印象記』五五頁。なお、金城のこの文については拙論「胡愈之についての二、三の事」、『燎原』No.35、一九九〇年）で紹介している。

(28) 『胡愈之文集』第六巻所収、「我的回憶」三五五頁。

- (29) 拙論「胡愈之についての二、三のこと」(『燎原』No.35、一九九〇年)。
- (30) 太田信夫訳、世界社、一九二八年。魯迅が触れる部分は同書三二九頁。
- (31) メドヴェージェフ著石堂清倫訳『共產主義とは何か』上巻(三一書房、一九七三年)二六四頁参照。
- (32) 邦訳に日原きよみ訳がある。『中国研究月報』No.63、二〇〇二年七月号。ここでの表題はこれに従う。
- (33) 『東方文化』二〇〇二年第二期、四一頁。なお嚴家炎は本論文を収録する自著『論魯迅の復調小説』(上海教育出版社、二〇〇二年)でこの部分の材源を魯迅博物館が所蔵し、今は失われてしまった胡愈之のインタビュ記録の原本としている。胡愈之と親しかった金城は一九三六年当時、あるいはその後、胡愈之から直接聞いていたのであろう。
- (34) 魯迅が毎日見ていた上海の有力紙『申報』で、一九三四年末のキーロフ暗殺、それに引き続くジノエフ逮捕の頃からこの魯迅と胡愈之の会見時期である一九三六年二月頃までに見られるソ連の粛清に関する報道は以下の日付の紙面。もちろんこれ以後もソ連の粛清の報道は続くので、魯迅はほぼ逐一ソ連での粛清の動きや世界各地を放浪中のトロッキーの動静を知っていた。
- 一九三五年一月十六、十七、十九、二十五日、三月二一日、六月十八、二十、二四日。一九三六年一月十八日。
- また、日本の新聞では朝日新聞がキーロフ暗殺からモスクワ裁判に到るソ連の政治状況を逐一詳細に報道している。同時期の読売新聞のソ連報道は要所を押さえてはいるが、それほど多くはない印象である。
- (35) 『双山回憶録 増訂本』(香港土林図書服務社、一九九四年)、二〇〇頁。本書邦訳は矢吹晋訳『中国トロッキスト回想録』(柘植書房、一九七九年)がある。このほかの関連資料としては羅章竜口述・丘權政整理「上海東方飯店会議前後」(『新文学史料』一九八一年第一期)、及びHIsaacs, *The Tragedy of the Chinese Revolution* Stanford Univ. Press, second revised edition 1961, p.p.334-335, 'Tsi-an Hsia (夏濟安)' *The Gate of Darkness*, Univ. of Washington Press, 1968, chapter of "Enigma of the Five Martyrs"等がある。なお、姚辛著『左連史』(光明日報出版社、二〇〇六年)は密告者は王明グループの康生だと断定している。一方、竹内実著『魯迅周辺』(田畑書店、一九八一年)所収「魯迅と柔石」はこの王明らによる密告説とは距離を置く。

- (36) 増田渉著『魯迅の印象』(初版単行本は講談社、一九四八年。ここでは講談社ミリオンブックス版、一九五六年) 四一～一四二頁。
- (37) 「新発現的魯迅書簡 致楊之華」(『魯迅研究月刊』二〇〇三年第六期附録)。楊之華は瞿秋白が国民党によって処刑された後、ソ連に渡り国際紅色救援会(MOPR=モップル)常任委員として当地に滞在していた。これは楊之華からの手紙に対する魯迅の返信である。
- (38) 『魯迅研究月刊』二〇〇三年第七期に掲載されたこの手紙に対する解説文、史紀辛著「一件重要而珍貴的史料」は転地先について「魯迅は具体的にどこへ行くつもりかはやはり言っていない」とし、前号の陳漱渝注とは微妙なニュアンスの違いを見せている。抗日民族統一戦線結成を目指す微妙な時期に魯迅が日本に行こうとしていたとするのはやはり憚られるのだろう。なお、魯迅を日本に療養に呼ぶ話は一九三二年ごろから何度も出ていたが結局実現することはなかった。これは魯迅の増田宛一九三二年四月二日付書信でもわかる。さらに、彼らばかりではなく、東京文求堂主人田中慶太郎も女婿増井経夫(後、金沢大学教授、専門は東洋史)を通じて、一九三五年冬、魯迅に日本療養を勧めていた。これについては増井経夫著『練香の火』(研文出版、一九八七年)九九頁、一一一頁、さらに田中壮吉編『日中友好的先駆者「文求堂」主人田中慶太郎』(極東物産株式会社、一九八七年)所収、ロベルト・ファン・グーリツク著「懐念文求堂主人」、同書四四一頁も参照のこと(この文章には年代記述に不正確な部分もある)。魯迅が結局日本(やドイツ)に行かなかったことについては増田、内山の記述以外に、錫金著「魯迅がなぜ去日本療養」(『新文学史料』一九七八年第一期)がそれまでの経緯を総合的に記述して参考になる。
- (39) 『魯迅回憶録散篇 中冊』(北京出版社一九九九年)所収五七四頁。
- (40) 「訪問蕭三同志記録」(『魯迅研究資料』4)天津人民出版社、一九八四年)、田剛著「關於蕭三『莫斯科來信』的幾点弁正」(『魯迅研究月刊』二〇〇八年第二期)等参照。
- (41) 王彬彬著「一九三六年的『救国会』与『民族魂』」(『鍾山』二〇〇七年第四期)参照。
- (42) たとえば、西安事変に到る張学良らへの働きかけや、抗日戦中また戦後のシンガポールなどでの統一戦線工作、国

共内戦終盤における毛沢東への情勢分析の進言などが想定できる。

主要参考文献一覧（注記したものは原則として除く）

1. 『胡愈之文集』 全六卷（北京三聯書店、一九九六年）
2. 『魯迅全集』 全十八卷（人民文学出版社、二〇〇五年）
3. 学研版『魯迅全集』 全二十卷（学研、一九八四～一九八六年）
4. 『魯迅年譜 増訂本』（人民文学出版社、二〇〇〇年）
5. 藤井省三著『エロシエンコの都市物語』（みすず書房、一九八九年）
6. 侯志平著『世界語運動在中国』（中国世界語出版社、一九八五年）
7. 王世儒著『蔡元培先生年譜』（北京大学出版社、一九九八年）
8. 唐宝林著『伊羅生与『中国論壇』（『近代史研究』一九九五年第六期）
9. 長堀祐造著『魯迅とトロツキー——中国における『文学と革命』（平凡社、二〇一一年九月）
10. 『近代日中関係史年表1799～1949』（岩波書店、二〇〇六年）

（付記）本編は拙著『魯迅とトロツキー——中国における『文学と革命』（平凡社、二〇一一年九月）では注などで部分的、散発的にしか触れられなかった魯迅と胡愈之の問題を、若干の新資料を加え整理、加筆し、まとめたものである。そのため、同書と一部重複がある。また、本編のもととなった拙論に「胡愈之についての二、三のこと」（『燎原』No.35、一九九〇年）、さらに二〇一一年九月に紹興で開催された魯迅生誕一二三〇年記念国際学会での口頭発表と論文集への提出原稿「魯迅与胡愈之」（中国語）がある。

なお、上記拙著『魯迅とトロツキー』には訂正すべき誤記、誤植がある。この場を借りて（次頁）内容に関わる正誤表を掲載し、読者の便に供したい。

『魯迅とトロツキー—中国における『文学と革命』』（平凡社、2011年9月）正誤表

頁	行（-は終りから数えて）	誤	→	正
44	-7	注26（「生活の諸問題」…）	→	（*「生活の諸問題」…）
45	-6	注27の文末に、以下を追加 *最近、ロンドン版、ニューヨーク版両方の古書を購入して確認したところ、いずれにもラコフスキーへの献辞があった。ここの記載は不正確ということになる。これは pp. 183～184注16及び p. 186注35についても訂正するものとする。		の訳文、さらに北京外文出版社 → の訳文や北京外文出版社
80	-2	注60 交友際関係	→	交友関係
83	-2行	魯迅はこれを売るよう「大いに掣肘を加えてい」るわけである。→ この一文削除		
104	-5～-4	注10末尾に*で以下を追加 *ドイッチャー著『武力なき予言者 1921-1929』（新評論版、P. 39）に拠れば、元画学生だったナターリヤはロシア革命後、人民教育部美術部長を務めていたことがある。		
117	5	注（52）→（53）（注52が重複）		
141	-2	注16の末尾に p.45注27*参照 を追加		
183～184		注35の末尾に p.45注27*参照 を追加		
186		スローガンを提出下 → スローガンを提出した		
212	3	（我対魯迅之認識）→（我對於魯迅之認識）		
226	-4	（北京文物出版社、一九七八年）→（北京文物出版社、一九七六～一九八六年）		
245	4	丸尾常喜氏の御教示に拠る。→ この一文、二つ後の注54の文末に移動。 上記一文移動の上、以下を注52の末尾に追加。 『胡風全集』（湖北人民出版社、一九九九年）第七巻所収のテキストではこの部分、初出を復元している。		
287	4	『魯迅選集』全十三巻別巻一 → 『魯迅選集』全十二巻別巻一		
308	12	中共中央 → モスクワの中共中央		
322	1～2	富田事變の外部要因→富田事變、AB 団肅清運動の外部要因		
328	9	夏子安 → 夏濟安		
375	-4	『文学の革命』→『文学と革命』		
394	-7	岩波版『魯迅選集』の → 一九六四年版岩波版『魯迅選集』第九巻の		
402	11	ほとんど → ほとんど		
406	7	通りあろう → 通りであろう		
417	3	『魯迅手稿全集文稿』（一九八六年） → 『魯迅手稿全集文稿』（一九七八～一九八六年）		
418	-4	秋吉久起夫 → 秋吉久紀夫		
429	11	『魯迅選集』全十三巻（岩波書店、一九五六年） → 『魯迅選集』全十三巻（岩波書店、一九六四年改訂版。一九五六年版は全十二巻別巻一）		
430	10	陳独秀「我対魯迅之認識」→ 陳独秀「我對於魯迅之認識」		
435	10～11	（『魯迅研究動向』一九九八年第八期） →（『魯迅研究動向』一九八九年第八期）		
451	右段上から19行目	楊詮 → 楊銓		
452	左段下から16行目	張友生 → 陳友生		
464	左段1行目	叢書 → 叢刊		
466	左段下から3行目	25-27年 → 25-29年		
467	右段17行目	夏子安 → 夏濟安		
469	左段郁達夫の項	1896-1944 → 1896-1945 第一高等学校、東大経済学部卒。→ 第一高等学校特設預科を経て、第八高等学校、東京帝大経済学部卒。		